

特集

社会につなげられない 隠されたひきこもり 8050 問題

高齢の親(80 歳代)と中高年(50 歳代)のひきこもりから成る同居世帯が生活に行き詰まる「8050(ハチ・マル・ゴー・マル)問題」が近年、顕在化しています。将来を悲観した高齢の親がひきこもりの子を殺害する事件や、子が親の遺体を放置した死体遺棄事件も発生しています。

中高年のひきこもりの場合、当事者本人はさまざまな経過の中で深く傷つき、自己肯定が低く、働いていないことを責められたり、働くことを求められたりするのではないかと不安を持つ傾向にあり、生活保護の申請をためらう人もいます。また、当事者の家族がひきこもりは自分たちに原因があると自分を責めたり、家庭内の問題を外部に相談することを恥と捉えて、親自身が介護サービスなど公的支援を忌避する傾向にあるとされています。

また、今般の新型コロナウイルスの感染拡大は 8050 問題にも影を落としています。高齢の親が、感染リスクを恐れて家族セミナーや個別相談会などへの参加を控えたり、また、テレワークの浸透によって平日昼間も多くの人が自宅で過ごすようになったことで、ひきこもり本人が自宅に居続けても、周囲に気付かれにくくなっています。

2021 年 4 月改正社会福祉法が施行され、個人や世帯が抱える複合化・複雑化した課題に対し「断らない相談支援」、社会とのつながりを回復する「参加支援」、「地域づくりに向けた支援」の 3 つの支援を一体的に進める「重層的支援体制整備事業」が市町村の努力義務とされました。精神保健福祉、就労・再就職支援、高齢者福祉、生活福祉の各制度の隙間を埋めて「断らない相談支援」、社会とのつながりを回復する「参加支援」、地域における多世代の交流を確保する「地域づくりに向けた支援」の 3 つの支援を多機関協働で一体的に進める地域共生社会に向けた取り組みが始まります。

「共生社会元年」ともいえる節目、中高年のひきこもり問題について取り上げました。扉の向こうにいる家族の SOS サインに気付くポイントや気付いた時の対応について、本特集を通じて読者に見いだしていただければ幸いです。

(「公衆衛生」編集委員会)